

1925年に刊行された吉田東伍の遺稿選集

えちごのれきしちり

『越後之歴史地理』を博物館が100年ぶりに印影復刻

いんえいふっく

日本歴史地理学のパイオニア、吉田東伍が病没したのは1918（大正7）年1月。53歳と9ヶ月という短い生涯に、名著『大日本地名辞書』を含め、単行著作20種45巻、論文約400編という膨大な著述を遺しています。

没後、実弟の高橋義彦（1870—1931）と門弟の高橋源一郎（1881—1961）の手によって東伍の歴史地理に関する論文・講演録など47編を集めた遺稿集が編まれ、1923（大正12）年8月、富山房から『日本歴史地理之研究 文学博士吉田東伍遺著』として出版されました。

同書の例言によれば高橋義彦は同書のほか、東伍の朝鮮蝦夷樺太に関する論集、越後に関する論集、宴曲能楽に関する論集等の出版も企図していたらしく「印行を他日に期す」と記しています。さらに巻末頁には出版予告広告とも受け取れる「文学博士吉田東伍遺著」の枠付文を配し、「日本歴史地理之研究」「蝦夷樺太及韓半島」「越後之歴史地理」「歴史地理的紀行」「宴曲及能楽之研究」「楽浪雑稿」を列挙していますが、この内実際に刊行されたものは『越後之歴史地理』のみでした。

『越後之歴史地理』は高橋義彦が東伍の越後に関する論説25編を撰び、校訂。1925（大正14）年1月、郷里新潟の書肆、萬松堂新潟支店から『越後之歴史地理 文学博士吉田東伍遺著』として出版したものです。

その後『日本歴史地理之研究』については『大日本地名辞書』の版元であった富山房が1975（昭和50）年に復刻版を刊行したこともあって、閲読は比較的容易いのですが、『越後之歴史地理』に関しては、当初の刊行が地方出版であったため流通部数も限られ、しかも重版、復刊履歴もないことから入手しづらい本となっていました。

同書刊行から百年。このたび吉田東伍記念博物館では当地の地域史研究にとって、いま

だに示唆に富む有用な見解も多い『越後之歴史地理』を博物館叢書6として復刻することにしました。

東伍が水原小学校の訓導をしていた24歳当時、雑誌『文』に寄稿した論考「高志王 附神祠及氏族」を初めとし、30歳、読売新聞記者時代に『史学雑誌』に載せた「東北辺土の沿革」。38歳、早稲田大の教授になり地名辞書を執筆中に『歴史地理』連載した「新潟沼垂蒲原の変遷について」。地名辞書完成直後43歳の時に『新発田新聞』に連載した「北蒲原の古代地理」。50歳の夏、加治川水害予防組合に招かれて講演したさいの講演録「加治川の変遷」。最晩年（53歳）、絶筆となってしまった『日本及日本人』への寄稿「快傑河井継之助」など新潟県関係の論述25編を収載。

本書からは「郷土の地理・郷土の歴史と言うものは、とりもなおさず郷土の未来に向かってその応用をまつものである」として全国津々浦々の「郷土」の未来を見据えるための実学を唱えた吉田東伍の足跡を辿ることができます。



《復刻版》越後之歴史地理 文学博士吉田東伍遺著

四六判 原著本文354頁 ￥1,800

吉田東伍記念博物館 窓口でお求めください

〒959-2221 新潟県阿賀野市保田 1725-1
tel 0250-68-1200 fax 0250-68-5016
mail y.togo@oregano.ocn.ne.jp

